

混乱の日々に耐えて

茨城県 高山 陸子

はじめに

日本が敗戦国となった日から、異国に住んでいた私たちの運命は一変してしまった。あのときのむなしさ、悔しさ、そして不安な日々の中には、多くの惨めで悲しい出来事があった。しかし、日本へ帰る日まで、だれもが苦難に耐えて頑張って生きてきた。けれども私にとっては、思い出いっぱいの故郷、大連との別れもつらいものであった。

一 遼陽市にて出生

父は、明治二十九（一八九六）年、茨城県那珂郡の農家の三男として生まれ、苦学して東京の岩倉鉄道学校を卒業。満州鉄道株式会社へ入社し、遼陽支社へ配属となった。大正十二（一九二三）年に同県人の母と結婚。当時の遼陽の街は、日本人が少なく母はとて

も心細かったそうである。

翌大正十三年に長男が誕生。同じく十五年に私が長女として誕生した。その年の十二月に大正天皇が崩御され、昭和という時代の幕開けとなった。間もなく長男が急に病死してしまい、両親の悲しみはいかばかりであったろうかと思う。昭和三（一九二八）年に妹が誕生。父は市内桜木町に洋風の一軒家を建て、家族四人で暮らし始めた。

しかし昭和五年春、父は大連沙河口鉄道工場庶務課へ転勤となり、大連霞町六丁目の社宅へ引っ越すことになった。十月には弟が誕生し、両親は大喜びであった。昭和六年に、今度は霞町三丁目の広い庭つきの二軒ずつの社宅に引っ越した。十一年に三女が誕生し、我が家は父母と女三人、男一人の六人家族となり、引揚げまでの約十六年間をこの社宅で過ごした。

霞町は沙河口鉄道工場に勤務するほとんどの世帯が住んでいた大住宅街で、満鉄経営の病院、消費組合、娯楽施設、学校、幼稚園、郵便局、派出所などがあがり、緑の多い、静かで、清潔で、整然とした街であっ

た。

二 戦局暗雲の兆し

昭和十二年七月七日、私が沙河口小学校五年生のときに、盧溝橋事件がぼつ発した。このころから内地より大部隊が次々に大連港へ上陸するようになり、前線へ出勤する前に、休息のため、私たちの家々に兵隊さんが二、三人ずつ宿泊されるようになってきた。

昭和十四年に私は小学校を卒業し、大連弥生高等学校へ入学した。すでに中国大陸へは日本軍が進撃し、南京が陥落したといっちは旗行列や提灯行列など祝賀行事が続いた。そんな中、昭和十六年十二月八日、日本がハワイ真珠湾攻撃で大成果を挙げたとの大本営発表があった。その時から日本は一直線に世界を相手に戦争へと突入していった。

三 旧満州国牡丹江へ父転勤

昭和十五年、満鉄工場開設の責任者の一人として父は牡丹江に単身赴任することになった。第二次大戦四カ月前の夏休みに、私は父の住む牡丹江へ遊びに行ったことがあった。建設途中の赤土が目立つ広い敷地を

見て殺風景だと思った。しかし、若い社員の方々は、不便な生活ながらも家族と一緒に暮らしていた。この家族の方たちが、やがてソ連軍侵攻により大変な苦勞と悲惨な運命に遭うことなど、誰も思ってもいなかったことである。

牡丹江には関東軍部隊が駐屯していたので、街の中も何となく戦時色の濃い雰囲気はあったが、人々は、まだ日々穏やかに暮らしていたようであった。

やがて戦火はますます激しくなり、大連にも敵機襲来に備えて、灯下管制や軍事訓練、消火訓練などを各家庭も協力することになり、父のいない分、母は一人で頑張っていた。

四 旅順師範学校時代

昭和十八年女学校を卒業し、四月に旅順師範学校女子部へ入学した。全寮生活の二年間は、戦時中でもあったので、実に厳しく規律正しい生活であった。食糧事情も次第に悪くなり、おかずの数も少なくなり、大豆入りのご飯となった。冬は氷点下の寒い中でも燃料不足のため、朝しか暖房してもらえず、しもやけや

凍傷にかかった。

また、個人の手紙も軍の検閲を受けるようになり、寮生も何人か憲兵隊本部へ呼び出された。ある日私も呼び出しの通知が来てしまった。何故呼び出しを受けたのか見当もつかぬまま憲兵隊の門をくぐると、廊下には学生や主婦や老人など呼び出しを受けたたくさんの人たちが並んでいた。名前を呼ばれ部屋へ通されると、いかめしい憲兵隊が机の前に座り「呼ばれた理由はわかるか」と聞いた。「全くわかりません」と答えると、私の手紙らしき便せんが開かれ、その一部が墨で真っ黒にぬりつぶされていた。よく見るとそれは私が母あてに出した手紙で、新しく引越した寮への道順を書いた地図の中に、陸軍病院を目印に記入したのがまずかったようであった。故意に記入したのではないと説明した後、きつい注意を受けやと許してもらった。学校へ帰る道すがら、悲しいような情けないような複雑な気持ちであった。

いろいろな厳しいことはあったが、若かった私たちは、戦争に勝つまでは頑張ろうと夏休みも返上して奉

仕作業や看護実習などに励んだ。

教育実習も終わり昭和二十年三月に卒業し、女子部八十数人は、関東州及び満州国の各地へ辞令をもらって、それぞれ赴任していった。

五 大連大正国民学校分校教場へ赴任

大連市の西方大正広場に本校があり、更に西へ向かって歩くこと三十分の所に西山屯分校教場があった。鉄筋三階建ての新しい明るい校舎で、周囲は住宅だけでなく、りんご農園や水源池があった。五年生まで分教場で学び、六年生は本校まで通学していた。若い男の先生方は出征されていたので、私は三年生七十二人を一人で担任することになった。いたずら盛りの児童をまとめるのは大変であったが、若くて張り切っていた私には楽しい毎日であった。

二十年の八月上旬、牡丹江に杜宅ができたので、母や弟妹は引越すことになった。父も引越し準備のため帰って来て荷造りをし、八月八日に沙河口駅へ発送を頼んだ。私は西山屯の下宿先へ荷物を送った。すぐ下の妹は、私と同じ旅順師範学校へ入学して寮に

入っていたので、翌九日に家族皆で「しばしの別れ」と会いに行った。妹は奉仕作業ばかり続いて疲れたのか、元気がないように思えた。

夕方家に帰って来ると、昨日送ったはずの荷物が庭に無造作に置きざりになっていた。駅へ問い合わせるのと「北満一带にソ連軍が進撃して来て大混乱し、鉄道はストップしている」とのことであった。家族一同はぼう然としたが、とにかく荷物を家の中へ運び、その夜は布団だけ出して寝た。

翌朝父は「引越しは無理のようだ。しかし牡丹江には多くの社員と家族たちがいる。何としても戻らなければならぬ」と言い、近所の人たちに引き止められても父の決心は変わらず、すぐに開襟シャツにリュックサック一つ背負って駅へ向かっていった。私たちも駅まで見送りに行ったが客車は一本も出ず、石炭列車が一本だけ出発するというので、父は駅長に頼み、石炭を積んだ無蓋車の上に腹ばいになって出発して行った。果たしてその石炭列車はどこまで行けるのやら、また走っている途中で振り落とされることはな

いのかと心で不安を感じながら、父の無事を祈りつつ手を振っていた。それっきり父の消息は、二カ月近く全く音信不通、消息不明となってしまった。

間もなく八月十五日を迎えた。いつものように出勤すると、主任から「本日正午にラジオで重大放送があるそうだ。児童たちは午前中で下校させ各家庭で聞くように指導してください」と指示があった。

正午に職員全員でラジオ放送を待った。時報の後、君が代が流れ、天皇陛下のお言葉を拝聴したが、雑音が入りはっきりわからぬまま放送は終了した。しかし何となく戦争終結を告げられたような気がする。話し合ううちに、先生方の顔がゆがみ始め、涙がひとりでに流れ、やがておえつとなりお互いに肩を抱き合ってその場を動くことが出来なくなった。敗戦国となった悔しさと空しさの涙だったのか……。真夏の校庭は人影もなくせみ時雨だけが聞こえていた。

六 治安崩壊

終戦日の翌日出勤すると、今まで掃除や使い走りをしてきた中国人少年の態度が一変し、仕事もしないで

腕を組み、にやにや笑いながら私たち職員に「早く日本へ帰れ」と怒鳴り散らすようになっていた。霞町の家から分教場へ通勤する途中に中国人の住んでいる部落があり、そこを通る時、石を投げられたり両手を広げて邪魔されるようになった。このように治安が悪くなったので、分教場は少しの間休校することになった。

日本の様子も、北満はもちろん、大連の街の情報もわからなくなってしまった。

「父はどうしているのだろうか。ソ連兵に殺されたかもしれない」と、ますます不安になった。

社宅近くの満鉄倉庫には、食糧や色々な物資が入っていたので、夕方になると中国人の群衆が押し寄せて略奪していった。その叫び声が、波のように風に乗って聞こえて来る日が続いた。暴動の騒ぎが聞こえるたびに、私たちは非常用品だけを持って、暗闇に身を隠し様子を伺ったりしていた。そんな中、旅順師範に行っていた妹が突然帰ってきた。微熱があり体調が悪かったらしく、他の寮生より一足先に帰省を許さ

れたそうで、家族皆で帰って来たことを喜んだ。

間もなく大連、旅順の街へソ連軍が進駐してきた。色々なうわさ話が飛び交い、女は見つかったら連れて行かれると言われていた。母は十九才と十七才の娘二人をどう守ろうかと心配した。十五才の弟はとても器用だったので、材木を切って家の窓全部に格子を取りつけてくれた。また、ソ連兵が来たら私と妹が天井裏に隠れるようにと、押し入れの天井入口に、取り外しの出来るはしごを作ってくれた。懐中電灯を持って天井裏へのぼり、くもの巣を払いながら、一坪半くらいの仮部屋を作った。

ある晩、ソ連兵の酔っ払い二人が私たちの社宅荒らしにやって来た。次々と戸を叩きながら怒鳴っている声が近づいてきたので、私と妹は急いで天井裏へ隠れ、はしごを持ち上げた。母は、ソ連兵が病人を嫌うと聞いていたので、部屋に布団を敷き、髪の毛を乱して病人のふりをして、何とか難を逃れようと必死の芝居を覚悟していたという。我が家の戸をドンドン叩き出したので、耳をそばだて緊張した。するとその時、

隣の中村さんのおじ様が酒を飲みながら外へ出て行き、ソ連兵に握手をして酒をすすめ、片言のロシア語でジェスチャー交じりに「ここには娘はいないよ」とごまかしながら追い払ってくださる様子が、天井裏の静寂の中でよく聞きとれた。ソ連兵たちはあきらめたらしく、ジープで別の方角へ去っていった。私たち母子は、中村のおじ様の頼もしい勇気ある行動に、心から感謝をしたのであった。

九月に入ると軍人や軍属だった方たちがぼつぼつと帰って来るようになった。次第にその数が増え、社宅のすぐ脇の道からは沙河口駅に列車が着くたびに復員兵の足音がザックザックと聞こえてきた。しかし父は一カ月経っても帰って来なかった。もしかして死んでしまったのではないかと家族五人で心配していた。

九月下旬のある朝、裏庭の塀の戸をコツコツと叩く音がした。母が用心深く「どなたですか」と呼び掛けると「おれだ、おれだ」と紛れもない父の声がした。

「あっ！ お父さんだ」と、皆で裏庭へ飛び出して行き、戸をそつと開けると、ひげ面のやせて汚れた姿の

人が立っていた。別れた時の父は割合太って血色のいい顔だったので、一瞬別人ではないかと思うほど変わり果てた姿であった。笑った顔ですぐ父とわかり、かけ寄ろうとした時、父は「体中がシラミだらけだから近寄らないで」と言った。

隣の中村さんも気が付いて出て来られ、無事を大喜びしてくださり、早速ドラム缶の風呂を作ってお湯を沸かしてくださった。父の着ていた衣類はすぐにごさでくるみ、燃やしてしまった。

ようやく垢を落とし、ひげをそって清潔になった父が、家の中へ入って来た。私たちは、父が無事に帰ってきた喜びを言葉にすることが出来ず、ただただ声を上げて泣いた。父も家族が無事であったことに目をうるませて喜び合った。その夜は遅くまで、父の今まで過ごしてきた苦勞話を聞かせてもらい、興奮してなかなか眠れなかった。

父の乗った石炭列車は、少し走っては止まり、少し走っては止まりしながら、何日目に奉天の先の鉄嶺まで行ったが、そこから先へはもう列車は行けないと

降ろされてしまったそうだと。そこで、北へ行く列車はないかと探し歩いていると、別の線路に無蓋車の車両が停まっていた、女、子供たちが乗っているのが見えたので、よく見ると、その人たちは何と牡丹江鉄道工場の社員の家族たちだったそうだと。神様のめぐり合わせかと喜び、皆も父を見て心強く思ったのか、大喜びしてくれたそうである。家族たちの話によると、突然ソ連軍が攻めてきたというので、男性社員は会社を守るために残り、家族たちを先に南へ逃がすことにし、ほとんどの家族は着のま着的の姿で、トラックに乗せられ列車を乗り継ぎ、鉄嶺まで来たところだった。年齢の高い男性社員二人が付き添ってきたということだった。父はもう牡丹江へ行くことは無理だと判断し、ここからは家族の世話をしようとしたそうだと。列車は何日も動いてくれず、皆の食糧を確保しなければならぬ父たちは、大変な苦労が続いた。ソ連兵に見つからないように明け方そっと抜け出して、中国人の農家へ行っては現金と引き換えに食べ物を買ってもらい、持ち帰る時も交替で見張りをしながら列車

まで運んだそうだと。しかし毎日食糧に足りぬことはなく、空腹で体力もなくなり、幼い子供たちの中には栄養失調や母乳不足で死んでいく子も出てきた。母親が、狂いそうに嘆き悲しむのをなだめながら、鉄嶺の大地へ埋葬するのは本当に辛かったそうだと。夜になるとソ連兵などが婦人たちにいたずらをしてくるので、父たち男性三人が体を張って抵抗すると、鉄砲を胸に突きつけてきたので、どうすることも出来ず悔しさをかみしめていたとのことだ。こんな残酷なことも我慢しなければならぬ敗戦国の哀れさをひしひしと感じた。

数週間してやっと列車が南へ向かって動き始めたので、奉天まで来たそうだと。どこで行き違ったのか、牡丹江の男性社員たちは先に奉天に着いていて、家族の行方を心配していたという。牡丹江の工場は、ソ連兵が来る前に爆破してきたそうであった。社員たちは、責任者の父が日本敗戦を知って大連へ逃げたのではないかとうわさし、見つけたらぶつ殺してやると殺気だっていたそうである。しかし、家族たちを守ってく

れていた事を知り、疑ったことを謝り、あらためて父に感謝していたそうである。父は、社員たちに家族を引き渡し、やっと自由の身になり大連へ帰ってくるのができたのであった。父は、その後疲労から黄だんになり、しばらく養生していた。あの時、ソ連軍の侵攻が数日遅れていたとしたら、私たち家族はどうなっていただろうか。また、牡丹江へ引っ越した後だったら……あるいは、行く途中であったとしたら……。一番下の妹は当時八才だったので、開拓村の子供たちのように親と離ればなれになり、中国残留孤児になっていたかもしれないのである。

黄だんが回復した父は、中国人が経営者となった沙河口工場へ労働者となって働きにいきだした。引揚げまでは、ほとんどの社員が父と同じように労働者となって暮らし続けた。

七 危機一髪の違い

父が帰ってきてからのある日曜日、西山屯で下宿するはずだった家に、私の荷物を引き取りに、父と弟と一緒にリヤカーを借りて出かけた。引き取った荷物を

整理するために、学校の職員室へひとまず運んだ。本類は重いので、近くに住む知人宅で預かってもらおうと、父と弟が運びに行っている間、私は一人で荷物をまとめていた。分教場の職員室は校舎と離れた一軒家で、北と南に窓があり、東側に入り口があった。するとその時、突然校門前にトラックの止まる音がしたので、北側の窓のカーテンを少し上げてのぞいてみると、ソ連兵が大勢乗っけていて、その中から四、五人の将校らしき人たちが校門の中へ入ってきた。私は、入り口から逃げ出せば見つかるし、ドアの鍵は奥のテールの上に置いていたので閉める余裕もなかった。とっさに、そばにあった荷造り用の麻ひもをドアの取っ手に巻きつけて、もう一方を手首にぐるぐる巻き、両手でひもを握りしめ、ドアの前の床に左下に横になった。息をひそめていると、まず校舎の玄関をたたき、大声で怒鳴っている声がした。そして今度は職員室の方へ歩いてくるなり、ドアを引っ張りはじめた。私は満身の力をこめて麻ひもをぐっと握りしめた。ドンドンたたいたり足でけったりするたびに、ド

アがかすかに外側へ開きそうになった。ふと足の方の南窓を見ると、カーテンが開けたままであった。ソ連兵がぐるっと回って窓からのぞいたら、私の寝ている姿が見えてしまう。体中の血が駆け巡っている。神様助けて！ 目をつぶり、あとは運命に任せるしかない」と必死にひもを握りしめていた。

何分たったのだろうか。日曜日で留守だと思ったのか、ソ連兵が校門の方へ戻る気配がし、やがてトラックの立ち去る音がした。その間わずかに二、三分の出来事だったのかもしれないが、私にはとても長い時間と思えた。助かったとわかり、ふらつくように立ち上がると、ドアを開けて、荷物も何もかも放ったまま、父たちが行った方へと駆け出していった。

その翌日出勤してみると、校舎のどの窓からもソ連兵が顔を出していた。児童たちは、校庭の隅の方にかたまって不安そうに立っていた。職員室の窓ガラスは破られ、先生方の机の中はひっかき回されてめちゃくちゃになっていた。主任の先生が、将校とジェスチャー交じりで何やら交渉していた。遂に、西山分校

は私が怖い思いをした夜に接収されてしまったのであった。あの時は下見に来ていたらしい。次の日から学習する場所を探すために、児童たちは自宅待機となった。一週間後、近所の空き家になっていた事務所を借りることになり、低学年は午前、高学年は午後の二部学習を始めた。しかし間もなくその事務所も接収され、次は倉庫の中、最後には住宅の空き家を借りて、畳に座って机も黒板もない所で勉強した。破れた窓ガラスから入って来る晩秋の北風は冷たく、体を動かして温めながら過ごした。大連市街の各学校は接収されなかったが、市街から離れた工業学校や西山屯分校が接収されてしまったのであった。

男の先生方が次々に復員してきたので、親元から通っていた独身女教師は退職を要求され、私も児童たちと別れることになった。子供たちとは八カ月間しか接することが出来なかったが、担任の子供たちとはたくさんの思い出を作ることが出来たし、私が初めて教師になっての貴重な二度とない体験をすることが出来たのである。

八 引揚げまでの生活

日本へいつ帰ることができるのか全くわからない日々の中で、家族六人が食べていくために、父は安い賃金だったが工場の下働きを続けた。私と妹は、毛糸でベビーソックスを編んでリボンをつけ、箱に並べて街へ売りに出かけた。ソ連兵の家族が時々買ってくれたが、いつでも売れるわけではなかった。中国人に囲まれて、箱ごと取られてしまったこともあった。そのほか、私は中国人の飲食店にも働きに行ったが、酒飲みのサービス相手をやれと主人に怒られたりして、五日目にやめてしまった。中国人の金持ちの家に手伝いに行ったりもしたが、昼間から麻雀をしたり、阿片を吸ったりする婦人たちの姿を不快に感じ、ここも長くは続けられなかった。ブランドーやウオッカを作る工場のびん洗いやレットテル貼りもやったし、注文取りに街の盛り場を歩いたこともあった。

デパートの中に「依託販売」といって日本人が持っている衣類や宝石、時計その他の品を預かって売るコーナーがたくさんあったが、妹はそんな販売の店員

になり、私は別のデパートの地下売場で、駄菓子屋の売り子になっていた時もあった。地下売場は食料品が多いので、浮浪児たちがうろうろしていた。ある時、私が目を離した一瞬、数人の子が手つかみで菓子を取って逃げ出した。私は追いかけたが、子供たちは素早く逃げられてしまった。その逃げる子の中に、私が西山屯で教えた女の子の顔が見えたのはとてもショックだった。その子は父が戦死して母と二人で暮らしていたことを思い出し、きつと生活が苦しくて、物を盗んで空腹をしのいでいたのであると胸が痛む思いであった。

そのころ、デパートの中で毎日何回も流れる歌謡曲があった。霧島昇が歌っていた「誰か故郷を思わざる」というレコードだった。郷愁を誘うその曲を聞いているのは日本を思い、また、皆の心の慰めとなっていた。終戦から一年以上過ぎた時、私の母校の小学校で、幼児を預かって世話をする仕事をしないかという話があった。早速引き受けることにして、久しぶりに学校へ行ってみた。すでに各学校には校長という職はな

く、主任という共產主義の考えを持った先生が一番上になっていた。私は一度教職を辞めたことになっていたので、教員としての身分ではなく、臨時の小使いのような仕事をさせられた。主任からは、教員になるためには講習を受けなければならないので、レーニン主義とか共產系の本を何冊も読んでよく勉強するようにと言われた。しかし私には興味がなく頭に入らなかった。日本へ帰るまでの形式的なものと考えて、表は赤くて中身は白の「赤大根」でいようと思った。

昭和二十二年に入ると、引揚げが近いという話が伝わってきた。地区ごとに順次集団が結成され引き揚げることとなった。

各学校も中国政府へ引き渡すことになり、すべての備品をそっくり置いて閉校することになった。しかし引揚げまでの月日が未定の間、霞町の中では青年団を結成し、児童たちを集めて勉強会を開いたり、演芸大会をしたり、防犯の夜回りを交替でしたりした。また、先に引き揚げる人たちの荷物運搬、世話係などの奉仕活動を収容所へ行って一生懸命続けた。

やがて沙河口地区霞町にも引揚げの順番がやってきた。私たち一家はB七十団第四班だった。一人あたりの所持品は、リュックサック一つと両手に持てる荷物と現金と決められていた。集結場所は下藤小学校だった。そこでソ連兵の荷物検閲を受けた。検閲は、一部屋に一家族ずつ入れ、人数と荷物の数を数え、目につく荷物を勝手にこじ開けて中身を引っ張り出した。私たちは取り上げられた物はなかったが、中には美しい衣装とか反物を抜き取られたり、制限以上の現金を隠し持っていたのが見つかり、脅かされて取り上げられた家族もいた。

全団員の検閲が終わると、トラックに乗せられて埠頭に近い大連実業学校体育館へ連れて行かれ、ここで二日間待機した。幾つもの団体がぎっしり詰め込まれたの二晩は、荷物に寄りかかって休息するだけだった。トイレは遠く、穴を掘って低いアンペラの囲いがあるだけなので、一人が見張りをしている間に用を足すのであった。トイレの中には、日本へ持って帰れないソ連軍票がいっぱい捨てられていた。

引揚げの朝がきた。また、トラックに乗り大連埠頭へ向かった。

昭和二十二年三月六日、昼近くになってようやく沖に船の姿が見えた時は、思わず皆立ち上がり「船が見えたぞ」と喜び合った。刻一刻と近づいてきた船の名は「恵山丸^{エザン}第五十三便」であった。沙河口地区一九八五人、中山地区五〇二人混成組も加わり合計三千数十人全員が乗船し終えて出航したのは、もう夕方であった。

出航のドラが船内に響き渡り、栈橋が上がってロープが外されると、船はゆっくりと動き出し、少しずつ向きを変え港外へと進んでいった。私たちは甲板の手すりにつかまって、思い出深い故郷大連の街をしかりと目に焼きつけておこうと、夕焼け空に包まれながら次第に細長く小さくなっていく景色を見つめていた。「さようなら愛しい大連、再び来ることはないだろう」と思うと、涙が流れて仕方がなかった。

九 引揚船で日本へ

船中の私たちは船底に近いところで狭く区切られ、

うっかり立つと上の段に頭がぶつかる程だったが、数日の我慢だと思い辛抱した。

夕食には大きなたるに入ったおかゆがでた。若い男女が運ぶ手伝いをした。久しぶりにお米のかゆを食べることが出来て、本当においしかった。

三日目に船員さんたちが演芸会を開いてくれた。今、日本ではやっている歌といって「リンゴの唄」を歌ってくれた。開放的な詩にびっくりしたものである。また、手品を見せてくれたりして、皆の心を慰めてくださった。引揚者の中からも歌や踊りなど飛び入りの披露があり、緊張の日々から解放され、喜びをかみしめたひとときであった。

四日目の朝「内地が見えたぞ」という声がして皆が甲板に上がってみると、はるか水平線の彼方に黒い鳥影が見えてきた。いっせいに歓声が上がった。上陸先は佐世保であったが、恵山丸は港外にいかりを下ろし、そこからは小舟に分乗して上陸することになった。島々が近づくと、畑には麦の苗の緑が美しく見えてきた。国破れても山河は生き生きと早春を迎えてい

たのであった。上陸すると直ちに全員、DDTを頭から全身に散布された。伝染病予防のためか、南風崎収容所に数日置かれた。

収容所へ入った日に、アメリカ憲兵隊舎へ数十人が名前を呼ばれて連れて行かれた。私も名前を呼ばれて、カマボコ形の兵舎の中へ入れられた。これは、大卒や専門学校出身者が思想的考えを持っていないかどうか調査したかったようであった。英会話ができないのにどうしようかと不安に思っていると、テーブルの向こうから「こちらへどうぞ」ときれいな日本語で呼びかけられてほっとした。主としてソ連軍の様子などを聞かれたが、私の相手をしてくれたアメリカ兵は二世だったので、「今、日本語を勉強している」と親しそうに話してくれた。

両親の郷里がどうなっているのかわからなかったが、母の妹が引揚援護局あてにハガキで連絡先住所を送ってくれていたので、本当にうれしかった。

数日後、やっと私たちはすし詰め列車に乗り東京へ向かった。やっとの思いで東京駅へ着くと、母方の

弟妹が迎えに来てくれていて、涙の再会をした。その晩は叔父の家に泊めてもらい、十数日ぶりに手足を伸ばして寝ることが出来た。

翌日、父の郷里茨城県那珂郡大宮町へ出発した。大宮の駅には従兄が大八車を用意して待っていてくれた。父の実家はそこから四十分くらい先の長沢という所で、小高い山の中腹にあり、長兄にあたる伯父一家が迎えに出てくれた。私たち弟妹はこの時初めて伯父一家と会った。六人も一度に迎えることになり、さぞ迷惑であったことだろうが、しばらくの間、客間の十畳の部屋に置いてもらうことになった。父母がよく話してくれていた自然豊かな日本の風景が、そこにはあったのである。

十 日本での再出発

伯父の家にいつまでも置いてもらうわけにもいかなかった。元農作業所兼物置だった所を借りて暮らすことになった。父の農地があるわけではなかったので、農作業の手伝いに行っては野菜や米を分けてもらった。また、すぐ下の妹と父は日用品の行商を始めた。

が、商売などの経験がない上に、人の良すぎる父は、病気で寝ている人がいるとただで品物をあげたり安く売ったりで、もうけなどほとんどなかったようだ。私は教職採用願いの手続きを県に提出し、運よく採用され、水戸市立五軒小学校へ五月から勤務できるようになった。弟は水戸一高の三年生に編入させてもらい、私と弟は、水戸市で金物店を営んでいた父の弟の家に置いてもらうようになった。叔父宅は朝早くから夜遅くまで商売が忙しいので、私たちも手伝いをした。その叔父は、戦後の建築ブームで釘や大工道具が売れて大もうけをしたらしく、私たち一家が住めるようにと家を建てて貸してくれた。

昭和二十四年春にその借家が完成し、田舎にいた両親と妹たちも水戸へ来て、親子六人で暮らせるようになった。父は五十歳を過ぎていたので就職先がなくななくて、市役所の臨時職員になった。すぐ下の妹も市役所に採用され、何とか生活できるようになった。

末の妹は五軒小学校の五年生に転入したが、終戦後の混乱から勉強などは全然していなかったので学業の遅

れでみんなについていくのが大変で随分苦労したとのことであった。

思えば日本が敗戦国となり、一日にして立場を大逆転させ、混乱の中を生き抜いて、やっと日本へ家族全員がそろって帰ることができたのは、不幸中の幸いであった。

異国の地で、今も眠っておられる多くの同胞の霊に対しても、戦争は二度と繰り返してはならぬことを誓うとともに、若い世代の人々にも伝えたいと思っている。

ハラシヨの少女

東京都 新橋 和子

一 東京から上海へ

父は根っから新聞作りが好きな人で、色々な新聞、出版などに携わっていた。上海に渡る前の十年間は、東京の城北地区でローカル紙を発行していた。